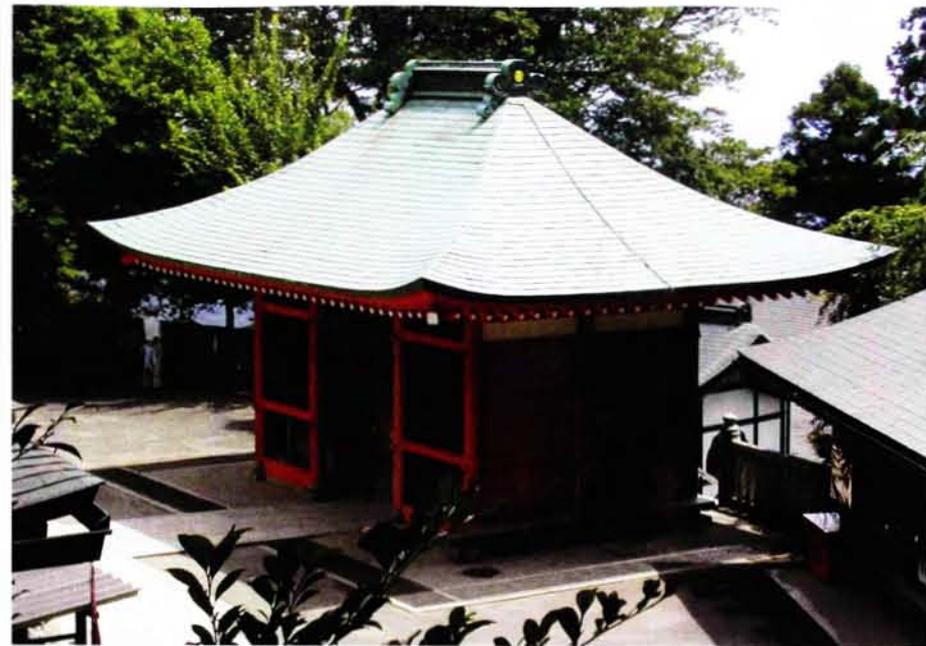


高尾山 歴史の散歩道

明治大学博物館 外山 徹

寛永古鐘



貞享元年(1684)再興の仁王門 寛永伽藍の入口

仁王門へと続く石段を上る。門の先には、視界に入りきらない巨大な大本堂の威容が現れる。香華のたなびく煙の先の大本堂は古色を帯びているが、明治三四年(一九〇一)の建立と、先ごろ百年を迎えた山史の中では比較的新しい堂である。それ以前には薬師堂・大日堂・護摩堂という三つの堂が並んで建っていた。

「高尾山」の扁額を揮毫したという沈草亭は、中国江蘇省出身の医者沈璠のこと。詩家でもあり書もよくした。竹村は文人らしくその筆跡に注目している。

仁王像の胎内から発見された銘札からは、延宝五年(一六七七)十一月晦日に火災があつて薬師堂が焼失したこと。仁王像は貞享元年(一六八四)に再興されたことが読み取れる。なお、扁額を揮毫した沈璠が長崎に滞在したのは仁王門再建よりも多少時代が下る。

紀行文に記された情景 江戸の人、竹村立義による紀行文『高尾山石老山記』(文政一〇年・一八二七)の記載。石壇有り、数十段を上り山門有り、高尾山と書せり、書は吳興沈草亭と有り、筆勢確渾なり、堂三つならびたり、右は大日、中は薬師、左は護摩堂なり、傍らに鐘撞堂・神楽堂

同じ時期の『多波の土産』(文政二年)には、「内に唐銅差し渡し六尺ばかりの香籠(香炉)」という記事も見える。六尺とは約一メートル八二センチと巨大であるが、前号に掲載した『八王子名勝志』(一八四七年以降成立)の挿絵にも覆屋をともしなう香炉らしきものが描かれている。作者は眼前にした三つの堂を「いとコウくし(神々し)」と称賛している。

現在新しく製造された鐘が掛けられているが、かつて使用されていた鐘がその前面に安置されている寛永古鐘である。鐘には寛永八年(一六三一)九月の銘がある。今は古色を帯びて緑青の緑色を吹いているが、その鐘は四百年近くの時空



寛永古鐘

を超えて私たちを歴史の世界へと誘ってくれる。

寛永古鐘の勸進

薬王院文書には鐘の勸進の文案が残されている。筆の主は高尾山一〇世堯秀。堯秀の晋山する以前、戦国末から江戸初期の間に高尾山の伽藍は焼亡し寺運は衰亡の極にあつた。堯秀は、中興俊源の師俊盛から十代後の醍醐無量寿院正嫡である堯圓が、寛延の高尾山縁起によると「その敬信に深きを愛し」と見初めた俊英であるが、この晋山に際しての法流継承が醍醐寺文書の

からも裏付けられており、元和七年(一六二一)二月一四日、醍醐寺田中坊において付法がおこなわれた記録が残る。堯秀が秘法を伝授されるにあたり、醍醐寺の記録にも「秘密道具所望」と見えるように、聖教や法器を授けられたのは、むしろ関東における伝法の拠点再興を期した醍醐寺の組織的な動きではないかと思われる。

故であろう。鐘の銘文と時期が重なるが、これはただ鐘の再興というよりも、伽藍自体の整備の進捗を意味するものだろう。鐘の銘は、文章としてはごく短いが、江戸時代初期の山内の様子を偲ぼせる貴重な一文である。漢文で記された趣のある文体なので全文を引用してみた。

文意は、「武州高尾山有喜寺は瑠璃光仏(薬師如来)の垂跡である。ほのかに聞く、往昔梵鐘を鑄て、以つて晨昏(朝夕)を報じていた。凶ずも世の不平に遇して、烏有(焼亡)による廢墟)となった。今、檀越の衆力をもつて小鐘を鑄銘した。そうして筍虚(鐘を吊る横木)に掛けた。その志は童子の聚沙に似たりといえど、絶えるを継ぎ、廢れるを興すの義ここに在り」となる。

まし、旅客の装を促す。大檀力をいたし、萬歳芳を伝う。」 「典章を守る」とは仏法の教えを伝えるという意味。「華鯨」とは梵鐘のことだが、以下は長い衰微の時期(霜・秋暮・夜)に終わりが訪れ、来るべき繁栄の予兆(黄鶴)とともに一寺が再興されんとしている様を謳う修辭なのだろう。檀越の力を結集し、再び仏法の道場を後の世に継承すべき態勢が整えられたことを述べている。

- 有喜靈利 瑠璃道場
- 点離俚俗 安置医王
- 神徳攸感 人民瞻望
- 爰新鑄法器 以守典章
- 華鯨吼月 黄鶴鳴霜
- 豊嶺秋暮 武陵夜長
- 覺無明睡 促旅客装
- 大檀致力 萬歳伝芳
- 寛永八年龍集
- 辛未秋九月 日
- 住持沙門法印堯秀

「童子の聚沙」という表現は仏典の教説から引用されたもので、鐘の鑄造を子供の砂遊びのようなものと、へりくだった表現をしている。「銘に曰く。有喜の靈利、瑠璃の道場、俚俗を点離して、医王(薬師如来)を安置す。神徳を感じるころ、人民せん望す。ここに、新たに法器を鑄て、以つて典章を守る。華鯨月に吼へ、黄鶴霜に鳴く。豊嶺秋暮で、武陵夜長し。無明の睡りを覺

今を生きる我々もまた、その鐘銘から往時の感慨を偲ぶことができる。 『参考文献』 『高尾山薬王院文化財調査報告』(東京都教育委員会、二〇〇三) おことわり 本連載においては、史料の引用について読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。